

朋栄が提供する強固な ファイルベース・アーカイブを 構築する製品

ファイルベース化を図る際には、オープンな環境をベースに構築することが大切です。ファイルベースシステムは局内のクラウド化に通じるシステムであり、その中でも過去の資産を活用するためのアーカイブシステムは重要な要素のひとつです。

LTR-100/120HS・LTS-50の提案

バイト単価や、高速読み書き性能の観点から、アーカイブのメディアとしてデータ磁気テープ（LTOテープ）が選ばれています。メモリデバイスや、回線録画された素材がファイル化された後は、データはネットワーク上で取り扱われるため、アーカイブするメディアの選択は慎重に行う必要があります。

アーカイブシステムでは、ビデオ信号をベースバンドで入力し、エンコード、ファイル化、メディア書込、デコード確認などの機能が必要です。このニーズを受けて開発した製品が LTR-100HS/120HS です。VTR ライクな形状をしており、録画操作をするだけで、LTOテープにMXFファイルとして記録することができます。

その際に、メタデータを付与することも可能です。また、長時間の映像素材の中から必要な部分だけを取り出したり、再生することも出来、再利用時に威力を発揮します。同録や長時間記録用途など、幅広い利用が可能です。

一方、過去のメディア資産ではなく、ノンリニア編集機で制作したファイルをアーカイブしたり、一度アーカイブしたLTOテープをノンリニア編集環境で読み出して利用したいといった要望も多くあります。そこで、ノンリニア編集システム上のLANに接続して、簡単にLTOテープにファイルを読み書き出来る装置としてLTS-50を開発しました。

一言で言えばLTR-100/120HSからビデオI/O機能を取り除いた機器ですが、編集データのバックアップ用途にも多に活用が期待されます。

比較検査の重要性

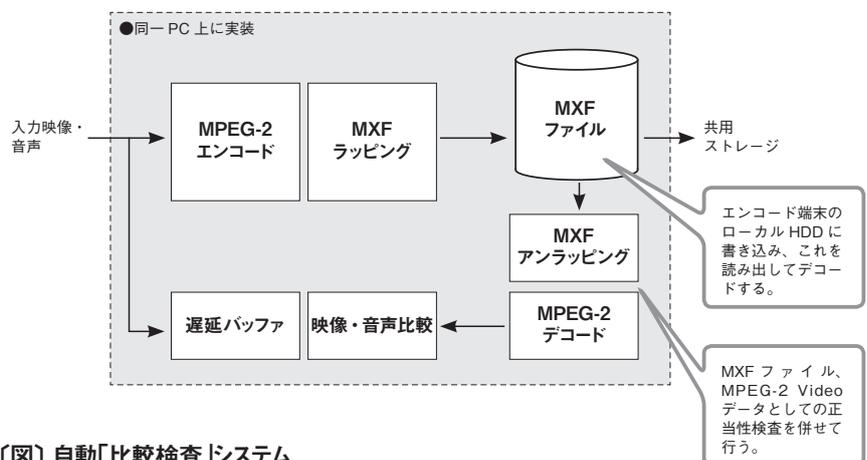
映像資産をファイル化する際、正確にエンコード、ファイル化されたか確認することが重要です（QC）。また、ファイルをデコードして映像音声人間の目と耳で確認する方法も重要です。

朋栄では、確認する部分を自動化し、入力映像音声とファイル化されたデータをピクセル単位で比較し誤差を検出することで、正常にエンコード、ファイル化が出来たかをリアルタイムに検査できる装置を開発しました〔図〕。今後、QCの重要性はますます高まり、尺の正確さ、カクツキ、ファイルの構成情報など多岐に渡る検査が求められるでしょう。安心して長期間に渡る保存素材を作るためにもQCを行うことが重要です。

中規模アーカイブへの発展

棚管理されたメディアを、MediaConcierge Center (MAM) で管理し、再利用する際に人間系で棚から必要な素材を取り出す運用から始める方法を第一段階とするならば、第二段階として、テープライブラリ（ロボットカート）を導入し、棚からの出し入れや、紛失や破損などから解放されるとともに、自動化及び省力化を図る方法があります。メディアの正副作成や、マイグレーションの自動化にも有効です。一旦導入したテープライブラリは、適切な世代移行を図ることでコンテンツの増加に対しても効果があります。

テープ自体にデータ構造を有するLTFSで記録したLTOテープであれば、ライブラリ装置にそのまま取り込むことが可能です。アーカイブを検討する際には、最初から大掛かりなシステムを検討するだけでなく、運用に合わせた段階的な導入を行うことも有効です。



〔図〕自動「比較検査」システム